



永都

リーフレット

発掘ニュース Vol.9

2010年3月
財団法人 向日市埋蔵文化財センター

向日市鶏冠井町東井戸



正殿地区東脇殿の検出状況(南東から)

長岡京
(784～
794年)

旧石器

縄文

弥生

BC
AD

古墳

飛鳥
白鳳

奈良

平安

鎌倉

室町

江戸

明治
昭和

皇位を象徴する甲冑の収納庫

～長岡宮跡第二次内裏「東宮」東脇殿の発掘～

脇殿の規模と構造

天皇の居所である内裏は、長岡京においては10年の間に二度の移転が行われ、3箇所^{こゝろ}に造営されていました。文献史料によれば桓武天皇は延暦8(789)年2月27日、「西宮」より「東宮」に遷御し(『続日本紀』)、延暦12(793)年1月21日、宮を解体するために「東院」へ遷御した(『日本紀略』)と伝えています。

平成21年8月に行なわれた「東宮」正殿地区の発掘調査で東脇殿が見つかりました。基壇を備えた東西棟の掘立柱建物で、その東端にあたる桁行(東西)3間以上、梁間(南北)2間分が確認されました。全体を復原すると桁行7間(約21m)、梁間2間(約6m)の身舎に15尺(4.5m)の廂を設けた建物に想定できます。脇殿は「東院」以降、礎石建物に転換しており、伝統的な掘立柱建物による宮殿建築は「東宮」が宮都の変遷史上最後になると思われる。

天皇が日常政務をみる場となった正殿地区の建物は正殿を中心に左右対称の配置をとっていたとみられ、東西各2棟から成る脇殿が正殿をはさんで口の字形に配置していたと考えられます。

小札の存在意義

脇殿の基壇外周を飾った緑石の抜取痕跡から小札が約30点出土しました。これは奈良・平安時代の鉄製甲を構成する小札で、脇殿に実用可能な甲冑が存在したことを示す資料になります。

小札は27枚分が確認され、大別して8型式に、同時代的特徴をもとに識別すれば4つの型式群に分けられます。古いものでは古墳時代後期の「掛甲」の特徴をもつものが含まれており、多くは奈良時代につくられたもので占められています。このことは、累代の優れた甲冑が内裏に伝世し保管されていたことを思わせます。確認された小札は桓武天皇が所有した甲の一部であり、大和王権以来の軍事指揮権を司る天皇権力を象徴する御物としての性格を有していた可能性が高いものと考えられます。

小札の発見により、長岡宮内裏の脇殿が武器収納庫であることが判明し、貞観13(871)年から確認できる平安宮内裏の東第二脇殿「春興殿」の機能が長岡京の時代に遡るといふ史実を解き明かすことができました。

脇殿出土の

小札

1期 6世紀末・7世紀前葉前後～680年代前半



古墳時代中～後期の「挂甲」の要素を備える一群で、大阪府シシヨツカ古墳(6世紀末葉)や奈良県飛鳥寺塔心礎(西暦593年)、宮城県郡山遺跡1期官衙(660年頃から680年代前半)などから出土した事例に近似するものが含まれる。右端は手甲か肩甲で千葉県城山1号墳などに類例がある。

2期 8世紀前葉



左端は東大寺正倉院収蔵の小札と同形品で、頭部が方形を呈し足部が尖る形状になる。全長は8.5cm、最大幅1.95cmで、長さ約7cm、幅1.4cmの正倉院例と比べると幅が太く、古相を示す。この種の小札は他に確認されておらず、兵部省に属し各種兵器の生産と管理に務めた造兵司でつくられたものと考えられる。

3期 8世紀中葉



左端上2点は東大寺大仏殿須弥壇の直下より出土した聖武天皇所用の甲に使われた小札と同型品である。表面には組紐と革の痕跡がのこる。右端の2点は全長7.0cm、最大幅0.85cmの大きさで、鉄甲の小札としては最も細小なものになる。左右に縦じ合わせると小札どうしの重なりが半分を占める2枚重ねとなり、軽量で防弾性に富み、造兵司でつくられた最新鋭の鉄甲と考えられる。

◀長岡京期の小札甲(想定復原)

対蝦夷戦争に従事した軍団兵士の武装
(郡山市教育委員会2008『清水台遺跡と古代の郡山』より転載)



4期 8世紀後葉



左端は平面長方形で幅が広く札端が丸く、茨城県鹿の子遺跡などの官営兵器工場から出土した事例に近似しており、地方からの貢納品とみられる。右端は胸脇に装着した小札板で大鎧にみえる鳩尾板の祖型と考えられる。

▲胴丸式挂甲(復原)

岡山県天狗山古墳出土例
古墳時代後期以降、短甲にかわり甲の主流になる
(写真提供/関西大学博物館)

▲褌襦式挂甲(復原)

和歌山県柳井経塚古墳出土例
奈良・平安時代の甲の起源にあたる
(写真提供/関西大学博物館)